グロウフィードの三姉弟

トト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

グロウフィードの三姉弟

【Nコード】

N4223S

【作者名】

トト

【あらすじ】

異世界に転生した元日本人マリア「グロウフィードは愛すべき家族と豊かな土地で幸せに暮らしてた。しかし、マリアが二十歳で臨んだ毎年王都にて行われる“春の大祭”は今までとはどこか違っていて…。

元日本人（前書き）

初投稿作品です。拙い部分が多いですが、お暇潰しにとどろぞ。

元日本人

フロイツ王国、グロウフィード伯爵の長女としてマリアが生まれたのは、今から20年前のことだ。

マリアはそれ以前は、日本人宮元真理子として生きていた。しかし、真理子はある事故に巻き込まれ、若くしてその人生を終える。その後、真理子の魂　そう表現したほうが尤もらしい　は新たにマリア＝グロウフィードという新たな生を受け、第二の人生を生きることになったのだった。

寒々しい冬が終わりを向かえ、日本であればもう桜は散ってしまつたくらいだろうか。締め切つた執務室は春の日が差し込み、暖かいというよりは暑いかも知れない。風を入れるため少し窓を開けようかと、そこに目を向ける。外の様子を見ると木の枝葉が大きく揺れている。室内、執務机に大量に置いてある書類を目に留め、マリア＝グロウフィードは窓を開けることを諦めた。

代わりに部屋を出て気分転換でもしようと、窓とは反対側の扉に向かった。ドアノブに手を掛けようとした瞬間、目の前の扉が勢いよく開かれる。廊下側に開かれる扉でなかったら、重厚な扉がマリアの顔面に直撃していたら。荒々しさや騒がしさを好まないマリアは顔を顰めたが、扉の前に立っていた人物を目に入れた瞬間、一気に顔の筋肉を緩ませた。しかし、すぐにまたそれを引き締める。「リリーナ。ノックも無く、断りも無く扉を開けるとは何事ですか？」

マリアの硬質な声音に、マリアの愛妹リリーナ＝グロウフィードはビクツと体を振るわせた。

リリーナ姫は豊かな金髪の上に真っ赤なりボンを括り着け、揃い

の真っ赤な靴、ピンクと白のレースが可愛らしいワンピースを着て、日焼け知らずな肌は頬と唇がほんのりと赤い、マリアが目に入れても痛くない、今年で8歳になる可愛い可愛い義妹である。その彼女が今、リボンも取れた髪はボサボサ、ワンピースは泥だらけ、落ち葉まみれで、靴に至っては元の色など分からないぐらいに汚れ、露出した肌に掠り傷まで作っている。唯一、無事なのが大きな翡翠の瞳ぐらいだ。

愛妹の余りの惨状に、マリアは思わずため息が漏れてしまう。元気なのは良いことだが、この愛妹はいささか元氣過ぎるところがある。もう少し、上流階級の令嬢として、落ち着きとか慎みを身に着けて欲しいところである。

「申し訳ありませんお姉さま！でも、見て見て！今年初めてのダンデライオン！！」

そう言つて満面の笑みでリリーナはその白魚の手 例の如く泥にまみれていた で握り締めていたダンデライオンを差し出す。ダンデライオンは日本人にも馴染み深い、あのタンポポだ。日本版のタンポポとフロイツ王国に咲くダンデライオンの違いはその花弁の色だろうか。リリーナ姫の持つダンデライオンは桜を思わせる淡いピンク色だ。

「お兄さまとお出掛けしたら見つけて、お姉さまにもお見せしたかったの。」

主人の代わりに所領管理諸々の仕事をする忙しい義姉に春の花を届けてくれた愛妹への愛しさにマリアの胸が一杯になる。なかなか身の休まらない仕事を続けて行けているのも、この愛妹の為だ。彼女の笑顔にはマリアを癒すマイナスイオンでも出ているのではないだろうか。リリーナ姫の笑顔に今までの目に入った惨状 廊下につけた泥の足跡も を全て無かったことにして、抱きしめてしまいたくなつたが、マリアは今一度氣と表情筋を引き締めて、更に硬い口調で言った。

「ありがとう、リリーナ。今年も無事に我がルーヴィックの土地も

春を迎えられました。……しかし、」

礼を言われたことでリリーナ姫の笑顔が更に深くなったが、次のマリアの怒声にも吹き飛んでしまった。

「次期グロウフィード伯爵となる者がなんて格好ですか！貴女はいつになったら服を汚さずに日々を過ごすことができるのですか？それに今は勉強の時間ではなかったかしら！？ジエームス！！そこに居るのは分かっているのよ！自分は関係ないとは思ってないでしょうね？出てきなさい！！」

「げえ！？バレた！」

「待つてお兄さま！私も連れて逃げて！」

隣室の扉をこっそりと開けこちらを伺っていた異母弟が今回の惨状の首謀者に違いない。マリアのひとつ下の異母弟は隣室から飛び出し逃げ出そうとしたが、自分も逃亡を図ろうとした妹姫に飛びつかれた。

「ちよつ待てリリーナ！分かった二手に逃げるぞ、俺はコッチでお前はアッチ。それじゃグッドラック！」

「私を囮にするつもりね！？イヤー！それなら道連れにしてやるんだから！！」

リリーナ姫にマリアの方に逃げるように指示し、余計に義妹の反感を買ったジエームス「グロウフィードは思うように身動きが取れず、リリーナも見捨てられてなるものか、と言わんばかりに抱きつかうので二人はすったもんだの末、バランスを崩し廊下に崩れ落ちた。

「ぎゃー！」

「ぐえー！」

馬鹿馬鹿しい程の馬鹿騒ぎをし、廊下に転がる弟妹の首根っこを掴む。8歳のリリーナ姫はともかく、先日19歳になり晴れて妻帯したジエームスの間抜けさにマリアは自分無き後のグロウフィード伯爵家の行く末に不安を感じたのだった。

グロウフィード伯爵家はルーヴィック地方のほとんどを支配する一大領主である。その資産はフロイツ王国で一二を争うほどと言われ、またフロイツ王国建国以前の歴史をもつ古く由緒正しい家柄だ。

以前、先代伯爵と伯爵夫人の間に嫡子が生まれなかったことで後継者の不在が大きな問題であったが、伯爵夫人の妹の末娘が養子として5年前、グロウフィード家にやって来たことで事無きを得た。それがマリアとジエームスの愛妹、リリーナ「グロウフィード姫」である。3歳で親元を遠く離れルーヴィック地方最大の都市メイジスを臨むグロウフォード邸に入ったリリーナ姫は天使のような風貌で大変可愛らしく、グロウフィード家の住人はリリーナ姫を大層可愛がり、どこに出しても恥ずかしくない立派な令嬢にするための教育に熱心に取り組んだ。

しかし、何事もなかなか思い道理に運ばないものである。

リリーナ姫は外見は大変可愛らしい天使だったが、中身が怪獣だった。マリアはリリーナ姫の引き起こした数々の問題行動に、日本で親しんだ怪獣映画を思い出す。自らの進む道にあるものを尽くなぎ倒して行き、後に残るのは正しく“惨状”だ。今回、服と廊下を泥だらけにしたことなどほんの序の口。彼女の周囲に割れ物を置くのをマリアは厳しく禁じている。無駄にゴミを増やしたくないし、何よりその破片で愛妹に怪我をさせない為だ。そんなマリアの思い虚しく、愛妹は問題行動の度にその白い肌を傷をこさえて来るのである。

クロウフィード邸で最も日当たりの良いリビングで、マリアは正しく正座する弟妹に懇々と説教をした後、直ぐにリリーナ姫に泥に塗れた召し物を替えた後、自らが汚した廊下掃除を命じた。貴族の後継の姫君に廊下掃除など普通は考えられないことだが、元日本人が二人もいるグロウフィード家では罰掃除くらい当たり前である。むしろ罰掃除を嫌がり、リリーナ姫の行動が大人しくなれば良いの

に、と思っっているがこれもなかなか上手く行かない。愛妹は使用人と戯れながらするこの罰掃除を楽しんでいるようだった。全く罰にならない。

マリアは家女中に淹れさせた紅茶を飲み、ゆっくりと息を吐く。そのまま身を横たえればマリア一人ゆっくりと寝られそうなソファに座っているのはマリア一人で、異母弟ジェームスはその傍らで小さく正座を続けていた。

「もうすぐ社交デビューなのに、あれで大丈夫なのかしら。」

「あの底抜けな明るさと元気がリリーナの一番好い所なんだ、別に直すようなもんじゃないだろ。それより、俺はいつまで正座を」「それが“外”で通用すると思っっているの？上流階級の底意地の悪さに、私の可愛いリリーナが太刀打ちできるとは思えないわ。」

「マリアは心配しすぎだよ。リリーナはアネキが思うよりずっと遅しいぞ。なあ、そろそろ正」

「近所のガキ大将には有効でも、陰湿なネチネチした嫌がらせはまた別でしょ？」

「マリアが傍に居とけばそれこそ平気だろ。それよりせ」

「いつも傍に居れるわけじゃないでしょ。はあ、マナーやらなにやら仕込んでけばまだ安心なのに。」

「オネエサマ、お願いします、そろそろマジで脚が限界…！」

栗色の目で必死にうったえる異母弟にマリアが手を振って応えろと、異母弟はゆっくりと脚を崩していく。彼の脚はしっかり痺れているようで、小鹿のように脚を震わせながら向かいの一人掛けのソファに向かっっていく。

「騎士が、情け無い。」

「正座に、騎士、関係、ね、え！」

やっとのことでソファに辿り着いた異母弟にマリアは紅茶を淹れてやる。異母弟は未だ脚の痺れと戦っており紅茶どころではなさそうであったが。

マリアの異母弟、ジェームス「グロウフィードは栗色の髪と瞳を

持つ青年騎士だ。グロウフィード家が所有する軍の將軍を務め、普段は領内の治安維持の為に領内を馬で縦横無尽に駆け巡っている。一般民衆からヒーローのように讃えられており、先日娶った妻が平民出身者であったことは、まだ記憶に新しい。

マリアとジェームスは正しく先代グロウフィード伯爵の子供であるが、彼らの母は正妻の伯爵夫人ではなく、伯爵の愛人であった。庶出の子供たちは伯爵夫人の元で育てられたが、由緒正しいグロウフィード伯爵家の跡取りとなるには、母親の身分が低すぎた。マリアの母は奴隷に等しい下女であったし、ジェームスの母は娼婦だった。せめてそれぞれのどちらかの母が貴族階級者であったならば、幼いリリーナ姫を後継者に据える必要はなかったのに、という言葉はクロウフィード伯爵家を取り巻く全ての人々の思いだった。

ジェームスとグロウフィードは領内の犯罪率低下を成し遂げ、多くの民衆に支持される青年騎士。

マリアとグロウフィードは先代伯爵夫婦亡き後、ルーヴィック地方の発展に大きく貢献し、グロウフィード伯爵家を王国きつての大領主に押し上げた立役者。

しかし、今この二人の偉大な功績が後継者たるリリーナ姫の伯爵位襲名の大きな障害になってしまっていた。

そして、この二人がとある事故でその人生を終えた元日本人である。

元日本人（後書き）

完結を目指して頑張ります。

春の大祭（前書き）

お気に入り登録ありがとうございます。
これを励みにがんばります！

春の大祭

フロイツ王国最大の夜会に“春の大祭”というものがある。

春の一の月、七日から7日7晩に渡る国王主催の大夜会で、国中から貴族たちが招待され、その規模は近隣諸国にも類を見ない盛大さである。さらに、この夜会は王侯貴族の息子息女の社交デビューの場であり、その他の夜会より平均年齢がぐつと下がるためか、とても賑々しい。しかし、それは気に障るものではなく瑞々しい生命力に満ちたもので、鬱々とした冬を吹き飛ばすに相応しい夜会である。

グロウフィード家でも今年は二人の令嬢が社交デビューを果たすこととなり、当主代行のマリアの腕もなるというものだが、その件の二人を前にすると今年の夜会は不安ばかりが胸を過ぎる。特にマリアの愛妹、怪獣姫のリリーナが今回どんな問題を引き起こすのか、その後始末を考えるだけで頭が痛くなるのだった。

「わー！部屋中がきらきらしてるわ、お姉さま！」

夜会の会場たる王宮の大広間に入るなり感嘆の声を上げるのは良いのだが、如何せんリリーナの声は大きすぎた。200人を超える人間が集まっている大広間は騒然としており、楽団のBGMも掛かっていたのだが、大広間の人間が視界に入る限りではあるが一斉にこちらに注目したことから、彼女の感嘆の声はかなり会場に響いたらしい。

今年晴れて社交デビューを迎えたりリーナは愛らしいピンクのナイトドレスに身を包み、結い上げた髪にもピンクのリボンを着けて、いつも以上に可愛らしい装いだ。問題は夜会終了までこの姿が維持できるかである。

「……。」

マリアと手を繋ぎ、動きを抑制されているリリーナは初めての夜会がお気に召したらしく、煌びやかな空間に興味深々だ。見たこともない巨大なシャンデリアに、極彩色に彩られた数々のナイトドレス、その合間に空間を引き締めるように落ち着いたナイトスーツ。目に楽しい空間に喜色満面のリリーナに対し、顔面蒼白なのが異母弟嫁のダーラだ。エスコートするジェームスの傍らで橙色の上品なナイトドレスはハーフアップした緋色の髪によく似合っていたが、煌びやかな空間に気後れしたのか、普段の明るい笑顔はなりを潜め、固い表情のまま俯いている。ジェームスは深い藍色のナイトコートを着て、普段の粗野な部分を覆い隠して爽やかな笑顔を浮かべながらも、顔色の優れない妻を始終気にして声をかけているが、ダーラにしてみれば、普段の雰囲気と全く違う夫にも困惑しているようだった。

ダーラはジェームスが身分を隠して野に降りていた時に見初めた女性で、平民出身だ。名門グロウフィード伯爵家への嫁入りは周囲から難色を示されたが、当家の人間、マリアとリリーナから反対どころか全面的に歓迎されたこともあり、2年間の花嫁修業を経て、今年の春晴れて成婚を迎えたのだった。しかし、この結婚に納得をしていない者が相当数いるのだろう。国中の貴族が集まる王宮の大広間から、ダーラに対する悪意が溢れていた。それがダーラにも感じられるのだろう、彼女は会場に入ってから一度も顔を上げていない。

グロウフィード伯爵家はフロイツ王国に今の王族が君臨する以前からルーヴィック地方を治めていた大地主で、その建国にも貢献した名門一族である。建国後は国政にも優秀な人材を多く排出し、その功績から伯爵ではなく侯爵位が相当では、という話も出ていた位で、事実30年ほど前には爵位上昇の話が具体的に進んでいたらしい。グロウフィード家が治めるルーヴィック地方も土壌が豊かで農

業、畜産が盛んな土地であった。

しかし、先代グロウフィード伯爵アイザックの時代にグロウフィード伯爵家は没落の一途を辿る。彼は酷い浪費家で更に女癖の悪い、史上最底の当主だった。豊かだったグロウフィード家の財政はアイザックにより一気に傾こうとしていた。それを食い止めたのが先代伯爵夫人クレメンスである。しかし、そんな夫人を裏切るようにアイザックは家人に手を出し、離れに困んだ娼婦や愛人と遊び歩いた。そんな中生まれたのがマリアとジェームスである。マリアの母はグロウフィード邸で働き始めたばかりの少女で産後に体調を崩しそのまま帰らぬ人に、ジェームスの母は困んだ娼婦の一人でアイザックの寵愛を失うことを恐れ、早々に育児を放棄した。二人はクレメンスに引き取られ伯爵家の子供として育てられることとなる。

庶子の二人は周囲の期待以上の成長を見せた。そもそも日本人として成熟した人格を形成していたこともあり、彼らは幼い頃神童と呼ばれた。しかし、二人はどこまでいっても庶民たる愛人の子供であり、それを生粹の貴族であったクレメンスは彼ら、特に男子であったジェームスが家督を受け継ぐことを許さなかった。こうしてクレメンスの妹の末姫を養子に迎えることとなる。もし、彼らの母親のどちらかでも、貴族であったなら、実家の後援を得て子供を、本人の意思など関係なく、グロウフィード伯爵に押し上げることが出来ただろう。

ジェームスが家督を継がなかったことは、ダーラとの結婚には都合がよかった。当主の結婚に政略的な面を完全に排除することは出来ない。仮に伯爵位を継いだジェームスがダーラと結婚することは可能ではあるが、そうすることで生まれるデメリット、下町の酒場の女店員の負担は只の青年貴族との結婚の比ではない。

しかし、問題が全く無いというわけでもない。そもそも、ジェームス、そしてマリアも確かにアイザックの子供であるので伯爵位を継ぐことは血統的に問題は無い。未だ8歳の養子のリリーナに継がせようと言う方がよっぽど無茶な話なのであった。ジェームスもマリ

アも、育ての親クレメンス夫人の意思を尊重して継承権の放棄とリリーナの伯爵襲名に尽力しているが、そのようなまどろっこしい真似をせずとも十分に成人し、実績も挙げた二人のうちどちらかが襲名すれば良いというのが大勢の意見だった。二人がリリーナを立てるのには其々思惑があり、ジエームスのそれがダーラである。

「これはこれはグロウフィード家の！」

未だ緊張の解けきれないダーラと、興奮気味のリリーナに落ち着くようにマリヤが声を掛けようとした、まさにその瞬間、声を掛けてきた人物に、マリヤは思わず舌打ちしそうになった。

4人に近づいて来たのは、恰幅の良い中年の男性、コンフォート子爵である。彼は光物に全身を包んでおり、照明の光を反射して眩しく輝いている。しかし、彼の最も輝いている部分は身に着けた金銀宝石ではなく、その頭頂部であることは彼の精神衛生上、決して口にしてはならない。

「お久しぶりでございます、コンフィート子爵。本日はお一人で？」

「ええ、妻が少々体調を崩してしまいました。倅は来ておりますよ。マリヤ嬢とお会いできるのを、それはもう楽しみにしておりますよ。な！私が先に貴女にお会いしたと知ったら、さぞ悔しがることでしょう！」

にこやかにマリヤに挨拶をするが、コンフィート子爵の興味はマリヤの後ろと傍らに控えるダーラとリリーナにあるらしい。隠しきれない好奇の目が早くマリヤに二人を紹介するように急かしている。夜会で初めて出会ったのがコンフィート子爵だとは、マリヤは苦々しく思ったがそれを顔の表面に載せることはなかった。コンフィートは選民意識の強い血統主義者である。

「まあ、叔母様の具合はいかがなのでしょう？せつかくの大祭ですのに、今度お見舞いの品を送らせて頂きますわ。」

「それはありがたい！妻も故郷の品に大変よろこぶでしょう！」

マリヤは、マリヤに会いたがっているという令息の話は流した。

令息はどうやら“マリアに気があるらしい”というが、政略的な臭いがするその話にマリアが応えることも、気分を良くすることも無い。

「ところで、」

コンフィートのじつとりとした視線が、ダーラに注がせる。彼はどうか、話の標的をダーラに絞ったらしい。マリアに向けていた友好的な笑みに、侮蔑の色を滲ませた。

「其方のお嬢様がジエームス様の新しい奥方でしょうか？」

ダーラに近づこうとしたコンフィートだが、すかさずマリアとジエームスが壁を作る。マリアの顔はまだ笑みを浮かべていたが、ジエームスはコンフィートに対する警戒心を隠しもせず、鋭い視線を向けていた。

「ええ、私たちの新しい家族のダーラ嬢ですわ。」

「お噂はお聞きましたましたが、真に庶民の娘を迎えられたので？ 国を代表する名門グロウフィード伯爵家ならば、もっと相応しい縁談があつたのでは？」

侮蔑も軽蔑も覚悟の上での結婚だったが、実際にその言葉を、本人たちの目の前で、堂々と言われるとは、マリアもジエームスも思つてはいなかった。ぎよつとした二人の様子を気に留めた様子も無く、コンフィートは更に続けた。

「ほほほ。しかし、衣装を改めると庶民といえども、それなりには見えるものですな。なるほどなるほど、ジエームス様が誘惑されたのも分かるというものです。」

ニタリと嘲笑ったコンフィートに、ジエームスは頭の奥で何かが千切れる音を聞いた。固く握り締めた手をコンフィートに伸ばそうとしたが、その手がコンフィートに届くことは無かった。

「ダーラっ！」

ジエームスが正に振り上げようとした腕の裾をダーラがしっかりと掴んでいた。頭は当初より更に俯き、体は悔しさか、いやそれ以上の悲しみに小さく震えている。ただでさえ慣れぬ空間に戸惑って

いた妻がコンフィートの言葉に大きく傷つけられた、その事実がジエームスに更なる怒りを抱かせる。今自身の腕を掴むダーラの手を振りほどいて、目の前の男に殴り掛かりたい思いに囚われながら、それでもダーラのジエームスを頼る手を振り払うなど出来はしない。彼女は自身の出自とジエームスとの差を常に気にしているのは知っていた。そのコンプレックスを取り除き、彼女をこの貴族社会の悪意から守ろうと誓ったのだ。貴族としての尊厳も体面もジエームスにとっては紙屑ほどの価値もない。しかし、己の不用意な行動をダーラは決して望みはしない。

コンフィートを睨み付けることしか出来ない自分に齒噛みしながら、ジエームスはダーラをその腕に抱き込む。ダーラは相変わらず頭を俯かせ、瞳に涙を浮かべていたが、決してそれを零すことはない。彼女は人前で泣くことを善しとしない事をジエームスはよく分かっていた。

「 MARIAは、ダーラと妻を守るように抱きしめるジエームスを完全に背後に庇う格好でコンフィートに相対す。彼女の口角は上がっていたが、決して笑っているわけでは無いことは一目瞭然であった。

「コンフィート子爵。」

グツと音程の落ちた低い声に、MARIAの不機嫌さがにじみ出ている。しかし、コンフィートは其の事に気付いていないのか、ダーラたちを嘲笑う。

「おやおや、新婚とは場所も弁えずお熱いことでプギユ！」

更に不愉快な口を開いたコンフィートを今この場で社会的に抹殺してやるるか！とMARIAが激したその瞬間、コンフィートは奇声を発し、その顔色が見る見る内に青ざめていく。突然のコンフィートの変調にMARIAは彼の視線の先を辿ると、そこには愛妹の小さな右拳が、正にコンフィートの急所に食い込んでいる所であった。

春の大祭（後書き）

更新ペースが上がるようにがんばりますが、あまり期待はできません。
気長にお待ちください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4223s/>

グロウフィールドの三姉弟

2011年5月10日14時40分発行